

正法眼蔵 第三 仏性

発心寺専門僧堂堂長 原田 雪溪

このとき、六祖その人ならば、この無仏性の語を功夫すべきなり。

「有無の無はしばらくおく、いかならんかこれ仏性」と問取すべし、

「なにものかこれ仏性」とたづぬべし。いまの人も、仏性ときゝぬれ

ば、「いかなるかこれ仏性」と問取せず、仏性の有無等の義をいふが

ごとし、これ倉卒（さうそつ）なり。しかあれば、諸無の無は、無仏

性の無に学すべし。六祖の道取（だうて）する「人有南北、仏性無南

北」の道（だう）、ひさしく再三撈摭（らうろく）すべし、まさに撈

波子（らうばす）に力量あるべきなり。

六祖の道取する「人有南北、仏性無南北」の道、しづかに拈放（ねん

ほう）すべし。おろかなるやからおもはくは、人間に質礙（せつげ）

すれば南北あれども、仏性は虚融（こゆう）にして南北の論におよば

ずと、六祖は道取せりけるかと推度（すいたく）するは、無分の愚蒙

（ぐまう）なるべし。この邪解（じやげ）を抛却（はうきや）して、

直須勤学（ちきしゆごんがく）すべし。

（原文は、岩波文庫「正法眼蔵」仏性から）